

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

大和高原の秋祭りに翁舞を演じるところがある。奈良市邑地の水越神社では宵宮に、舞台で官司等神社関係者が舞う。「とうとう、たらりたらり、ららり」というが、たらりらり、ららりどうりで始まり、後半部になると参拝の人々が賛美を包んだハナを次々と舞台に投げ入れる。これに応えて翁舞の終末部の「これも当社に立て給う願なれば今日吉日を以て済ませ申す。五穀成就夙延命、一切所願かいろう（皆令）満足、いずれの願か成就せざらん、これ喜びの萬歳樂」と唱えて舞う。すると「もう一番！」の声がかかる、これを繰り返す。

もとはハナの数だけ行つたという。終末部の繰り返される詞章は「添え翁」とも呼ばれる。添えとはいうが、実はこれが土地の人々に取つては一番大事な部分だった。「今日吉日をもつて済ませ申す」の言葉は、無事に一年を過ごせたことに感謝して、昨年掛けた願を一旦解く「願済まし」をし、また新たに願を掛け直すという意味だろう。それが宵宮に行われる。

世阿弥は「神事ノ願ノ翁ナド、聊爾ニスル。ソト舞イテ百文ヅツ取る」（『申葉談儀』）と批判的だが、植木行宣氏は世阿弥のいう「願の翁」は各地の「添え翁」にあるとみていく。



邑地水越神社の翁舞
=筆者提供

翁への願掛け根強く

翁舞は能樂の世界では、能にあって能にあらずとされる特別な曲で、「翁」また「式三番」とも呼ばれる。正月や祝賀の際などに冒頭に演じられる。天下泰平・国土安穏・五穀豊穣を「祝禱」する曲であるが、大和高原では、邑地の他に月ヶ瀬の桃野八幡神社、興ヶ原の天満神社、狭川の九頭神社で秋祭りに演じられている。奈良坂の翁舞は、千歳と三番叟が登場し、翁は三人で立合の舞をするものだが、これらはいずれも「一人翁」が演じられる。

大和郡山市今国府と小林には、山城の上狹の長命大夫が所有していた室町期の翁面が伝わり、今も両地区の秋祭りに登場する。老体の神が祝福をもたらすという翁への信仰が根強く続いている。（奈良民俗文化研究所代表）